浄瑠璃姫を捜し求めて
―「人形浄瑠璃」にその名を残す悲劇のヒロイン―

外国語学部　スペイン語学科　3年
酒井　美由紀

問題の所在　浄瑠璃姫と人形浄瑠璃は関係あるの？
第一章　「浄瑠璃姫物語」のテキストを求めて
第二章　『義経記』に見る義経伝説
第三章　ご当地物語としての「浄瑠璃姫物語」
第四章　「浄瑠璃姫物語」のその後の発展
結　論　出会いの場としての宿場

問題の所在　浄瑠璃姫と人形浄瑠璃は関係あるの？

愛知県の中南部の国道一号線沿いに岡崎市がある。ここは西三河地方の経済の中心地で繊維やトヨタ関連の自動車工業が盛んである。又時代を遡れば徳川家康の生地で、東海道の宿場として発展した街でもあった。この岡崎市の西側のやはり一号線沿いに、矢作（やはぎ）という街がある。矢作は私の生まれた町で、両親の故郷でもあった。現在では岡崎市に併合されたが、私の幼い記憶では、広い濃尾平野の小さな田舎町で、あたりは田畑ばかり。畦道の遠い先のこんもりした林の中に集落や神社や墓地があった。当時母達は小川で洗濯をし、生活水を井戸に頼っていた。

そんな懐かしい田園風景が現在でもその面影を残す矢作の町だが、時折帰省して岡崎の町を歩くとき、所々で「浄瑠璃姫」という名前に出会う。それは岡崎公園端の浄瑠璃姫の供養塔であったり、浄瑠璃寺と通称される光明院や、姫と最も関わりが深いとされる誓願寺、あるいは姫が幽閉されたとされる庵跡など、まるで町全体が浄瑠璃姫の歴史でおおわれているかのように名所が各所に点在している。ではそもそも「浄瑠璃姫」とは何者か。その名前からしてあの人形浄瑠璃と関係があるのだろうか？　興味津々で調べてみると、「御伽草子集」のなかに収められた「浄瑠璃十二段草紙」に行き着いた。

「浄瑠璃十二段草子」は宿場町「矢矧（矢作）」を舞台にした、三河の国の国司の娘と、京の鞍馬から逃れ奥州の藤原秀衡のもとに向かう牛若丸こと源義経の悲恋を描いた物語。題名の如く12段からなる草紙で、作者不詳。正確な年代も謎だ。舞台背景は登場人物からして千百年代と推測されるとしても、実際に「浄瑠璃姫物語」が語られるようになったのは江戸時代に入ってからで、その約三百年の時間の空白は何を意味しているのだろうか。以上の問題を解き明かすため、第一章では浄瑠璃姫に関するテキストについて、第二章では姫の恋の相手とされる義経に纏わる『義経記』について、第三章ではご当地物語としての「浄瑠璃姫」について、さらに第四章では浄瑠璃姫と人形浄瑠璃との関連を探ってみた。

第一章　「浄瑠璃姫物語」のテキストを捜し求めて

さて、前述の如く「浄瑠璃姫物語」を探し当てるのにはずいぶんと手間取った。「浄瑠璃姫物語」という物語自体はどうやら存在するらしいが、しかしその所在が分からない。図書一覧やネットで検索しても出てこない。まさか初っぱなから頓挫するとは･･･。あきらめずに更に検索を進めると「浄瑠璃十二段草紙」が正式な題名であることが分かった。やれやれ、そういうことだったのか。ところが、ここから先に進めない。こんどはこの「浄瑠璃十二段草子」の所在が見つからない。物語の概要は出てくるのだが、本体ともいうべき原文が一体どこに？　あちこち探し回ってやっと見つかった！　「浄瑠璃十二段草子」は、「新潮日本古典集成（新潮社）」の一冊『御伽草紙集』に収められている９つの草紙のうちのひとつだったのだ。(注1)「浄瑠璃十二段草紙」や、まして「浄瑠璃姫物語」のタイトルでは見つからないはずだ。

この「浄瑠璃十二段草子」は、題名が示すとおり12の章で成り立っている。それではその物語を読み進めてみよう。

平安時代後期、三河の国の国司源中納言兼高とその妻で遊君矢矧の長者は、長い間子宝に恵まれなかった。三河鳳来寺（愛知県）の薬師に両親が祈願してやっと子供を授かった。両親はたいそう喜び、薬師瑠璃光如来の申し子として「浄瑠璃姫」と名付けた。なるほど浄瑠璃姫の名前の由来は、ここから来ているのか。

さてその姫が14歳（16歳との説もある）の承安４年のことだとされる。奥州の藤原秀衡を頼って京を下った牛若丸は、金売吉次の供の姿に身をやつして、三河国矢矧に一夜の宿を取った。宿を出てその近くを歩いているとき、どこからか美しい琴の音（ね）が漏れ聞こえてきた。牛若丸はその音に応えるように自ら笛を併せた。それを聞いた姫は笛の正体を怪しみつつも侍女に命じて屋敷に招き入れた。お互い顔を見合わせた二人はたちまち惹かれ合い、一旦宿に戻った牛若丸は姫への募る思いを抑えきれず、その夜館に忍び込んで姫と契りあった。引き留める姫ではあったが、旅を急ぐ牛若丸は姫に再会を約して金売吉次と共に更に東に下った。

蒲原の宿（現在の静岡市）まで至った時、牛若丸は病に倒れた。旅のその先での仕事が気になる吉次は、宿の主に金を託して牛若丸の面倒を頼み、彼を残して先を急いだ。病人を疎んじた主は牛若丸を田子の浦の浜に打ち捨て、託された金銭を我が物とした。一人捨てられた御曹司は哀れにも息を引き取った。その折、宿に残した彼の宝物が化身となって彼を見守り、源氏の氏神が浄瑠璃姫の夢枕に立ってその災難を告げた。姫は侍女と二人田子の浦浜に駆けつけて、浜辺に捨てられた哀れな姿の牛若丸に涙するとその涙が彼の口に入り、不思議な力で命を吹き返した。

健康を取り戻した牛若丸は、自分は奥州の藤原秀衡を頼りとして、なんとしても平泉にたどり着き、その擁護のもと八十万騎の兵を従えて再び京へ上り、平家を追討しなければならないとして名残惜しがる姫を説得した。更に彼は愛宕・比良野の大天狗・小天狗に姫と侍女を矢矧まで送るよう頼んだ。天狗達は二人が来るのに９日もかかった道を、わずか片時で送り届けた。その後牛若丸は旅を続け、無事平泉の秀衡の館に到着した。

「新潮日本古典集成」の『浄瑠璃十二段草子』はここで終わっているが、疑問が残る。若き義経と浄瑠璃姫の巡り会いの恋は、実際にあったことなのかどうか？　それというのも、もともと義経にはその悲運な生涯故様々な逸話が全国に残り、果てはモンゴルのチンギスハンさえ義経の逃亡の果ての姿ではないかとの憶測までまことしやかにささやかれるほど、その真偽のほどが問われるものも多々あったからだ。

もともと歴史上のヒーローには逸話・伝説はつきもので、時の経過と共にその話に尾ひれがついて、それが一人歩きしていかにも実話（ノンフィクション）の如く世間に定着していることも決して希ではない。奇々怪々のエピソードも飛び出すこの「浄瑠璃姫」のストーリー上の「義経」との関わりは実際のものであったのだろうか、との疑問が沸いてもおかしくはないだろう。そこで義経に纏わる史実を探し当てるべく、義経関係の逸話伝説の出所とされている『義経記』に頼ってみた。

結果、どうやらこの物語も『義経記』の中のエピソードのひとつとなることを想定して書かれたものではないかと察するに至った。あるいは『義経記』の物語のひとつとして収められてもおかしくはないが、その成立時期がかなり後であるため、収められなかったとも考えられるのだ。

第二章　『義経記』に見る義経伝説

ということで、『義経記』の中に「浄瑠璃姫」は登場しない。奥州を目指す途も上京する途も、義経は確かに東海道を辿っているはずなのに、「浄瑠璃姫」の名も「矢矧」の名も『義経記』には出てこないのである。そこで『義経記』とは何ぞや、から入ってみよう。

『義経記』は８巻からなる軍記物で、源義経の一代記。室町初・中期の成立、作者不詳とされる。前４巻には幼少期の数々のエピソードが、後４巻には兄頼朝の討手からの逃亡と平泉での自害に至るまでが描かれている。(注2)

平治の乱で破れた源義朝の末子として生まれた牛若丸（義経）は、鞍馬の寺に預けられた。

成長と共に自らの出自に目覚めた牛若丸は金売吉次

に伴われて、奥州の藤原秀衡の援助を請うべく東へ下る。秀衡との対面を果たし、そのもとにしばらく逗留した後、都の状況が気になる義経は、秀衡には告げずに京を目指した。京に上った義経は、比叡山の鬼若としてその剛力ぶりで名をはせ、やがて太刀強盗として恐れられた弁慶との争いの末、君臣の契りを結ぶという運命的な出会いをする。このあたり時間が前後していて史実とはだいぶ違うようなのだが、しかし平家追討後には、梶原景時の讒言で頼朝の不興を買い、追われる身となった。『義経記』の後半はその逃亡記である。わずかな従者と弁慶の助けによりやっと奥州秀衡のもとにたどり着き、その擁護のもと平安の時を得たのもつかの間、予期せぬ秀衡の死に遭い心の支えを失う。さらには秀衡の子泰衡の寝返りで、平泉からも追われることとなり、遂に自害してその波乱の生涯を閉じた。

この物語は厳正な史実に基づいた義経伝というより、むしろ数ある義経伝説の中でも当時の大衆の判官びいきに迎合した、義経の悲劇の武将という部分を強調したパートをまとめて構成されたもののように思われる。義経の平家追討の大将としての活躍ぶりはほとんど語られず、牛若丸としての幼少期と兄頼朝との確執、果ては逃亡・流浪の旅という不運な生涯に果てた義経の一代記としての色合いが強い。そこには生涯の供となる弁慶との出会いから、主従の絆を結び最期に至るまでの細やかな描写があり、義経といえば･･･と語られる白拍子静御前の運命や、最期まで過酷な逃亡を供にした妻についても語られて、軍記ものとはひと味違った義経ロマンの世界が展開されている。そういった意味で『義経記』は史実の陰で起こったかもしれないエピソードを主軸とし、鎌倉から室町期の庶民の感覚にあった英雄伝に仕立てられたものではなかろうか。

重ねて言うが、このストーリーに三河の国の浄瑠璃姫は登場しないのである。では何故義経は、「浄瑠璃十二段草子」では矢矧の宿の浄瑠璃姫のもとに現れたのだろうか。結論を先取りして言えば義経伝はその悲運のヒーローとして日本の様々な場所でまことしやかなエピソードを残している。岡崎矢矧の宿の地元でも、ご当地物語として矢矧の名を知らしめたいと、浄瑠璃姫の悲恋の相手として義経伝説を語らせたと考えても不思議はない。

https://citypromotion.okazaki-kanko.jp/report/discover-show-3

第三章　ご当地物語としての「浄瑠璃姫物語」

本来「浄瑠璃姫物語」は諸国を遍歴する芸能者による語り物として創られ、庶民の人気を博して広く世に知られるようになったもので、時代と語り手によって様々なシナリオが披露された。実際、地元岡崎に在る資料では、「浄瑠璃十二段草子」に描かれた結末以降のストーリーが残っている。それはこうなっている。

再び関東へ下る義経を見送り矢矧に戻った浄瑠璃姫は、母親から追い出されて庵に幽閉される。義経に再会することだけを生きる望みとしたものの、悲嘆にくれて乙川に身を投じその人生を閉じた。その後平家討伐の軍を従えて上京する義経は矢矧を訪れ姫の死を知りその墓を訪れた時、供養塔の五輪が裂けそこから姫の魂が飛び出し天に昇っていった。(注3) 現在岡崎に残る浄瑠璃姫に纏わる古跡の数々は、どうやらこの逸話に由来するらしい。

さてこの物語のストーリーは別として、『浄瑠璃十二段草紙』で格別に印象深いのは、随所に描かれる表現の巧みさ、豊かさである。登場する姫の館やその庭園、主人公達の衣裳の子細に至る描写はことごとく誇張され、韻を踏んだリズミカルさでこれでもかこれでもかと迫ってくる。語り部の口から出てくるこれらの表現は、聞き手の庶民の興味と豊かさへの関心をそそり、人気を博したに違いない。

当時庶民受けしたこの類いの語り物には、(注4) 例えば「小栗判官と照手姫」の伝説がある。
小栗判官と照手姫のお墓のある、藤沢市の遊行寺長生院の小栗判官縁起によるあらすじでは以下のような話である。(注5)

常陸の国小栗城主の小栗満重は謀反の廉で鎌倉方から攻められて三河への逃亡途中、横山という盗賊

の館の絶世の遊女照手姫と懇ろになったが、それを嫉んだ横山の陰謀にかかって毒殺される。横山は小栗の財産を奪い、その死体は上野原（現在の山梨県上野原市）に遺棄する。ある夜、遊行14代上人に閻魔大王から小栗を救えとのお告げが下り、上野原に行ってみると餓鬼と化した小栗が現れ、上人は回復のために彼を湯治場に送り込む。一方、逃亡した照手姫は追っ手に捕らえられ、川に捨てられるが辛くも漁師に救われるものの、またしても嫉妬深い漁師の妻の手によって売り飛ばされ、宿場町で小栗と再会する。健康を取り戻した小栗は横山を処刑し、照手姫を妻に迎えた。

この物語の大筋はざっとこのようだが、想い合う主人公達の境遇や、人の恨みをかって死に至りながら、不思議なお告げに救われ蘇るくだりなど、浄瑠璃姫ストーリーに通ずる共通点が点在する。配下の裏切りによって不遇な状況に陥ったヒーローと彼を恋い慕うヒロインの生死の危機を、霊験あらたかな超自然、摩訶不思議な現象で救うというオカルトティックな筋立ては、神仏への帰依を日常とする当時の市井の人々にとっては、戦記物大スペクタクルよりも身近な、感涙を誘う語りものであったことだろう。

これらの物語は語りものとして古くから庶民の間の娯楽として受けとめられていた。それぞれの演目には定まったテキストもなかった。それが江戸初期までには人形を操りつつ語る語り手太夫の解釈・力量で様々に表現されるようになった。その源を同じとしても、語り手の脚色如何で歴史上の英雄的人物像をロマンあふれる情緒的なストーリーに仕立て上げ、聞き入る聴衆の感動と涙を誘うのは語る太夫の腕にかかっていた。

第四章　「浄瑠璃姫物語」のその後の発展

それでは、「浄瑠璃姫物語」もそのひとつとしてあった中世の「語り物文芸」はどのようにして江戸期の「人形浄瑠璃」へと成熟していったのだろうか。

浄瑠璃の原点とされる「語り物」は平安末期にすでに存在した。今日では日本の代表的な古典的民俗芸能のひとつとして、ユネスコ無形文化遺産に登録された「人形浄瑠璃」の原点は、その歴史を平安時代まで遡る。その時代にはすでに賤民芸能として、特に盲僧のものとして琵琶や扇拍子を伴奏に哀艶な節回しで寺社の縁起物語、仏教説話や民間伝説を語り歩くものから、中世になると平家琵琶で戦記物『平家物語』などを語る形が整った。

そして16世紀に半ばに、戦記物とは違った新鮮な題材を扱った語り物への希求が高まった。そこで生まれたのが若き義経と、三河の長者の娘の悲恋を描いた「浄瑠璃姫物語」という新曲であり、ここに「浄瑠璃」という新しい語り物の一派が生まれた。実際に駿河の宿で「浄瑠璃」をうたわせたという記録が残っているらしい。(注6)

この頃、琉球から蛇の皮を張った「蛇皮線」が渡来し、蛇の代わりに猫の皮を使った「三味線」が、浄瑠璃の伴奏楽器として定着した。そしてその広まりとともに、耳から入る「語りもの」だけでは物足りない民衆の欲求から、「見る浄瑠璃」へと移ってゆく。ここに門付けして各地を歩く賤民芸能であった人形まわしが結びつき、1590年代に人形と浄瑠璃のコラボが成立した。

こうして「人形浄瑠璃」が誕生する。庶民の興味を惹くことで、まず京都でその支持を広げていった人形浄瑠璃は、16世紀末には江戸で爆発的な人気を得たが、俗に振り袖火事と呼ばれる江戸の大火が災いして劇場がほとんど焼失し、活動の場を失った人形浄瑠璃芝居のほとんどは上方へ戻らざるを得なかった。上方に戻った人形浄瑠璃は、竹本義太夫という語り手、即ち太夫が独特の曲調を創作し、大阪道頓堀に「竹本座」を創立（１６８４）、さらには翌年浄瑠璃作者として近松門左衛門を迎えた。近松はすでにその頃、歌舞伎作家としてその名を馳せており、ここでも演者と脚本家のコラボが成立した。(注7)

竹本義太夫（１６５１～１７１５）の師事した清水理兵衛の時代には、今までの戦記物・霊験物一点張りから新しい節や唄を模索・創造する傾向が生まれつつあった。義太夫はそこから更に新しい曲節を創造、近松との第一作は『出世景清』という人情ドラマであった。

一方、近松門左衛門（１６５３～１７２４）は士族の出身ながら歌舞伎・浄瑠璃の世界に傾倒し、それまでの古い作風の殻を打ち破る戦国出世物から、その時代の世相を反映するような「義理人情物」を得意として浄瑠璃の旧形式を打ち破り、新しい浄瑠

璃を模索していた。それまでの戦乱の殺伐とした武将の世界から、庶民が社会的な存在感と力を得た江戸時代に入り、市井の人々が自分たちの文化を築き上げたときでもあった。文字は読めずとも政情には疎くても、封建社会の中での庶民の日常の苦しみや葛藤、或いは逆に非日常性へのあこがれを演劇の世界は満たしてくれた。竹本義太夫と近松門左衛門の織り成す世界は、町人社会の欲求に応えるように拡がりを見せていった。特に『曽根崎心中』や『心中天網島』を代表とする「心中物」は、社会の制約故に添い遂げられない男女の悲劇的な結末を切々と語る義太夫（語り手太夫）にあわせて、人形使いが悲哀情緒たっぷりにその情景を人形の中に込め表す様は、芝居小屋の桟敷の客の感涙を誘ったことだろう。(注8)

その後人形遣いは改良を重ね、一人遣いから三人遣いとなり、その表現力を更に豊かにした。新作も次々と発表され竹本・近松2人の築き上げた人形浄瑠璃は順調な発展を遂げ、その後に続く武田出雲、並木千柳、三好松洛による『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』は時代物3大名作として、まさに人形浄瑠璃の黄金期を形成する。

しかし、ひとの好み・要求とは気まぐれ勝手なものである。人形による人間もどきの表現では物足りない市民は、生身の役者による演劇を求めるようになった。そこで日の目を浴びたのが「歌舞伎」である。それまでは人形浄瑠璃の脚本を拝借する形で演じてきたものの、浄瑠璃人気に押されその陰に隠れてパッとしなかった歌舞伎ではあったが、人気役者の登場や、表現の実際性では遙かに人形を凌ぎ、その人気をさらった。もともと上方で栄えた庶民芸能の歌舞伎は、その豊富な作者・役者陣の活躍で格段の充実を重ねて一世を風靡し、人形浄瑠璃が敗退するのは時間の問題だった。

その後衰退の一途を辿った人形浄瑠璃は、上演拠点として栄えた「竹本座」「豊竹座」も18世紀後半にはその幕を閉じた。残ったわずか1軒が阿波出身のの植村文楽軒で、現在人形浄瑠璃が「文楽」と呼ばれる由縁となった。しかし長き歴史の中で培い築き上げた資産ともいえる芸術性は歌舞伎に反映し引き継がれ、人形浄瑠璃が歌舞伎の繁栄の礎に寄与したことは疑う余地はない。

現代において人形浄瑠璃は文楽として1955年に国の重要文化財に指定され、特定非営利活動法人「人形浄瑠璃　文楽座」が保存・公演活動を担っている。

結論　出会いの場としての宿場

矢作（矢矧）の名はその昔、日本武尊が当地に駐留した際、川の対岸の賊を平定するにあたって矢作部が竹で多数の矢を作り、献上して大勝したことによるとされる。矢作は伊勢湾へと流れ出る矢作川、乙川という河川に恵まれ、特に矢作川の影響を最も受けた地域では古くから交易や交通の要所として栄えた。(注9) 宿場ではモノ・ヒト・カネを巡るエピソード数知れず、殊に行き通う人々はその人生と運命を背負って旅していたのであろう。まさに一期一会の舞台の上で、義経が当地の長者の娘と巡り会い、恋に落ちてもおかしくはあるまい。そしてそれは悲恋でなくてはならない。矢作にとって浄瑠璃姫はその地のヒロインであり、その恋の相手はヒーロー的逸話の持ち主でなくてはならないのである。

宿場町の矢作とすれば、おそらく矢作・岡崎の街道を奥州目指して下っていったであろう義経をめぐる伝説の一編として名乗りをあげ、その存在を広くPRしたかった。そうすることで矢作の宿の名を広く知らしめ、近隣宿場との客の争奪にも優位にありたかったのかもしれない。

後世にまで伝えられた人形浄瑠璃の「浄瑠璃姫」は、その「語りもの」としてのデビューから幾百年もの後に広く庶民の芸能として親しまれ、その「浄瑠璃」という名を国の文化財として残した。その成立の遅れから、義経伝説の表舞台には立てなかったが、地元岡崎では街の大切な歴史として「義経との悲恋の姫」は今に語り伝えられ、広く市民に愛されて、それにゆかりの寺社・跡地は岡崎市の文化遺産として大切に保護継承されている。岡崎の地に浄瑠璃姫は、今も牛若丸との再会を期して眠っているのである。

註

(1) 『御伽草子集』（新潮社版、平成16年、松本隆信校注）はもともと江戸時代に刊行された「御伽文庫」23編に対して用いられたことを源とするが、『御伽草子』を室町時代物語の汎称として用いる意味において、本書では9編の作品を選択。「浄瑠璃十二段草子」はその第1編として収められている。

(2) 『義経記』（薩摩書房版、昭和36年、高木卓訳）は軍記物の系統に属する作品。成立年代は室町時代初期とされ作者不詳。古典日本文学全集による『義経記』は数多くの義経伝説を事件的に分類し、全8巻で成り立っている歴史小説とされる。

(3) 以下はインターネットサイト（http://www.okazaki-renaissance.org/discover/show/3）Discover Okazaki［岡崎の新たな魅力を発見］「浄瑠璃」みなもとの地・岡崎～浄瑠璃姫姫伝説 に基づく。
(4) 語り物文芸のひとつとしての説経節－説経節はもともと経典の講節として始まったもので、初期にはいわゆる＜門（かど）説経＞で、ささら（日本の民族楽器のひとつ）をすり、鉦（しょう）をならして語る説経師があったが、後に人形浄瑠璃として発展するにいたった。(「世界大百科事典５」平凡社, 1972 年, P.641)
(5) 小栗判官と照手姫の伝説については、室町末期に書かれた「鎌倉大草子」が最も古いとされるが、ここでは小栗判官と照手姫にゆかりの遊行寺長生院に伝わるエピソードを取り上げた。（http://shonan-fujisawa.jp/archives/H190612.html 小栗判官と照手姫・八柳修之著）
(6) 『演劇概論』（東京大学出版会、2017 年、河竹登志夫著 P.204-205）によれば、享禄四年（1531）の連歌師源宗長の旅日記に、駿河の旅宿で「古座頭あるに浄瑠璃をうたわせ」たと記されている。「浄瑠璃姫物語」は浄瑠璃の先駆としての新曲であった。
(7) この前後の記述は、『演劇概論』（東京大学出版会、2017 年、河竹登志夫著　P.204-208）によれば、近松門左衛門は義理人情ものを得意とし、浄瑠璃と歌舞伎両方に名作を残した。人形浄瑠璃と脚本家としての近松は浄瑠璃の一時代を築き上げた立役者であるが、同時に歌舞伎の脚本は、人形浄瑠璃衰退後は、浄瑠璃演目が人形に代わって役者が演じる歌舞伎に流れてその隆盛の原動力となった。
(8) 当時人形浄瑠璃は大衆芸能であり、芝居小屋は現在の劇場のようなエンタテインメントを提供する場で、常設されたものより川沿い街道沿いに仮設されたものが多い。桟敷はその座席で、大衆はお気に入りの演目がかかると演目或いは役者目当てでその興業を楽しんだ。（『演劇概論』東京大学出版会、河竹登志夫著　P.204-208 を参照した。
(9) 矢作の地名の由来については、「日本大百科全書」２００１－23（小学館 1988 年 P.206）による。

参考文献

◎「日本人名大辞典」（講談社 2001 年　P.1211）
◎「大辞泉」（小学館　上・下 2012 年）
◎「御伽草子集」（新潮日本古典集成・新潮社　平成 16 年　松本隆信・校注）
◎「演劇学のキーワーズ」（ぺりかん社 2007 年）
◎「演劇概論」（河竹登志夫著・東京大学出版会 2017 年）
◎「日本古典芸能史」（今岡謙太郎著・武蔵野美術大学出版局 2008 年）
◎「世界大百科事典 23」（平凡社 1972 年　P.506-508,）及び「同書５」（P.641）
◎「義経記」（古典日本文学全集１７・高木卓著・薩摩書房版　昭和 36 年）
◎「日本大百科全書」2001 －１８（小学館 1987 年 P.１７４）および「同書」2001 －２３（1998 年 P.206）
◎ 岡崎市の浄瑠璃姫伝承については、インターネットサイト Discover Okazaki［岡崎の新たな魅力を発見］「浄瑠璃」源の地・岡崎～浄瑠璃姫伝説 http://www.okazaki-renaissance.org/discover/show/3 を参照した。
◎ 小栗判官と照手姫については、インターネットサイト http://shonan-fujisawa.jp/archives/H190612.html と http://www.jishu.or.jp/yugyouji-keidai/ogurihangan-terutehime を参照した。